

令和8年3月5日

報道関係者各位

国立大学法人福島大学  
cotopas コトパス

## 食品のリスクを可視化するための資料を実務家と共同開発 — リスクの可視化が不安の軽減につながることを全国調査で確認 —

福島大学食農学類の種村菜奈枝准教授および高田大輔准教授らは、食品のリスク(注1)が、ハザード(注2)だけでなく、どの程度摂取するかという「量」の要素と組み合わせられて理解されることに着目しました。そして、そのリスクの大小に関する伝え方の違いが、消費者の受け止め方にどのような影響を与えるかを検討しました。

全国調査の結果、食品のリスクを構成する主要な要素である「ハザード」と「摂取量」を分かりやすく可視化して説明することで、食品リスクに対する過度な不安が軽減され、リスクに対して落ち着いた受け止め方が示される傾向が確認されました。

このことから、食品の安全性に関する情報提供においては、基準値(注3)を数値で示すだけでなく、生活実態に即した形でリスクを伝えることの重要性が示されました。

本研究の成果は、2025年12月29日に、食品に加えて、ひとの健康に関連する幅広い科学分野を扱う国際専門誌「Food and Humanity」にオンライン掲載されました。

(注1) 食品にハザード(危害要因)が存在することで人の健康に悪影響が起こる可能性とその程度

(注2) 人のからだに対して健康への悪影響をもたらす可能性がある要因

(注3) 食品の安全性を確保するために、国が定めている数値のこと

種村研究室では栄養指導などの現場で実務に携わる cotopas®代表じつなり ことみ氏(栄養士)とともに、これまでの研究成果を踏まえ、食品のリスクをより「直感的」に理解できるよう、リスクの可視化に着目したコミュニケーション資料の開発に取り組みました。本取り組みの特徴は、「リスクの可視化」という考え方を通じて、誰もが「直感的」に、リスクの大小がどのように決まるのかを理解できる形で伝える点にあります。開発した資料では、食品のリスクの大きさを表す2種類の箱を用意し、食品中のハザードを表すボール状の素材を箱に入れていくことで、ボールの数(摂取量)や種類の違いにより、リスクの大小がどのように変化するのかを、食育等のイベント参加者が手を動かしながら「直感的」に体感できるように設計しました。

参加者は、遊び感覚で操作する中で、「どれくらい摂取すべきか」「どのようなハザードか」によって、リスクの受け止め方が変わることを自然に理解できます。

本資料は、食育や栄養指導のほか、地方自治体主催の市民のみなさまとのリスクコミュニケーションなど、さまざまな現場での実践を通じた活用が期待されます。

## ◎ 研究成果のポイント

- ✚ 食品リスクの大小を、「ハザード」と「どの程度摂取するか」という要素を組み合わせ可視化することでリスク理解の一助となる可能性が示唆されました。
- ✚ 実際の研究では、米、野菜、果物、豆類、キノコ類を例に、平均的な国民の日常的な摂取量や、他のリスク比較情報を示しながら、段階的に食品のリスクを可視化して説明したところ、食品の放射線リスクに対する過度な不安が和らぎ、リスクをより落ち着いて受け止める回答が増える傾向が確認されました。
- ✚ 食品の安全性に関する情報提供では、基準値を示すだけでなく、生活実態に即した形でリスクの構成要素を伝えることが重要であることが示唆されました。

## ◎ 研究の背景

食品の安全に関する基準は、私たちの健康を守るために設けられています。一方で、これらの情報は生活者にとって日常と結びつけて理解しにくく、食品のリスクが実際以上に不安として受け止められることがあります。食品のリスクは、性質だけでなく「どのくらい食べるか」によって変わりますが、その考え方を分かりやすく伝える方法は十分に検討されてきませんでした。そこで本研究では、リスクの伝え方に着目しました。

## ◎ 研究の方法

全国の消費者 2,000 名を対象に 2 種の食品リスクに関する説明を段階的に提示し、リスクの受け止め方や不安の程度がどのように変化するかをインターネット調査で検討しました。

## ◎ 論文情報

- 掲載雑誌：  
Food and Humanity
- 論文タイトル：  
Level of support for deregulation of radiocesium standards in foods based on consumption
- 著者：  
Nanae Tanemura, Daisuke Takata (Fukushima University)
- 掲載論文 URL (DOI)  
<https://doi.org/10.1016/j.foohum.2025.100986>

## ◎ 研究支援

本研究は、基盤研究(A) (課題番号：21H04743) の助成を受けて実施されました。

## ◆ エビデンスを社会実装するための取り組み

### ◎ 食品のリスクを可視化するための資材のポイント

- ✚ 食品リスクを「ハザード（危害をもたらす可能性がある要因）」と「摂取量」の2つの要素に分け、手を動かしながら直感的に理解できる体験型の資材です。
- ✚ 遊び感覚で「摂取量」の増減の操作が可能な設計により、難しい数値や専門用語を使わずに、リスクの考え方を自然に触れられることを目指しています。
- ✚ 栄養指導、地域での説明の場など、現場での活用を想定して開発されました。



〔 リスクの大きさを表す2種の箱と、ハザードを表すボールを用いて、ハザードや摂取量の違いによるリスクの変化を体感的に理解できる資材 〕

### ◎ 研究者コメント



#### 種村 菜奈枝（食農学類 准教授）

難解な「リスク」の考え方を、誰もが「直感的」に理解できることを目指しています。

### ◎ 実務家コメント



#### じつなり ことみ（cotopas® 代表）

専門的な説明が難しい場面でも、この資材を使うことで、参加者が自分で考えながら、食のリスクの考え方について自然に理解を深める一助となることを願っています。

## ■ 国立大学法人福島大学 食農学類について

本学類では、東日本大震災・原発事故からの復旧・復興の取り組みを通して、各地の農林業・食品産業・地域社会で貢献しています。また、生産環境・農林業・食品産業・消費者の連鎖であるフードチェーンに対応したコースがそれぞれ配置されている点に特徴があります。

・ウェブサイト <https://www.agri.fukushima-u.ac.jp/>

## ■ 子育て事業コンサルタント cotopas® コトパス について

当社は、食育の他、保育・子育て現場のニーズに合わせた教材、ワークショップ商品の開発・制作を行っております。また、講座やイベントのコンサルティング・プロデュース業務も展開し、企画から運営まで一貫したサポートを提供。ご依頼者の想いを形にすることを使命とし、伝える側も受け取る側も心動く体験の創出を大切にしています。

さらに、独自の教室、【ごっこあそび親子教室】を開講。身近な素材や自然物を活用し、親子が向き合う時間を通じて、こどもの「生きる力」を育む場を提供しています。

本研究では、ワクワクするようなリスクコミュニケーションの資材開発に携わっています。

・ウェブサイト <https://cototsukuri.com/>

## ◎ 活動支援

本資材の制作は、福島大学も参画した全国の大学・大学生を応援し、教育・研究分野へ支援の輪を広げるオンラインチャリティーイベント「Giving Campaign 2025」を通じて支援者から寄せられた、種村研究室のリスクコミュニケーション活動を支援するためのご寄附を活用して実施しました。

本活動の取り組みに対してご支援を賜りました皆さまに、心より感謝申し上げます。

## ◎ 報道機関関係者の方々へのお願い

記事の際には「福島大学の研究成果」であることを明記いただけますと幸いです。

(お問い合わせ先)

### 【研究ならびに資材に関すること】

福島大学 食農学類

准教授 種村 菜奈枝

電話：024-503-4978

メール：[ntane@agri.fukushima-u.ac.jp](mailto:ntane@agri.fukushima-u.ac.jp)

(種村研究室ホームページ)

<https://www.foodrs-lab.com/>

### 【広報に関すること】

福島大学 総務課広報係

電話：024-548-5190

メール：[kouho@adb.fukushima-u.ac.jp](mailto:kouho@adb.fukushima-u.ac.jp)